

2022 年 3 月 6 日（日）「約束と律法」

ガラテヤ 3:19-22

19 では、律法とは何でしょうか。律法は、約束を受けた子孫が来られるときまで、違反を明らかにするために付け加えられ、また、天使たちを通し、仲介者の手を経て制定されたものすぎません。20 仲介者というものは、一人で事を行う場合には要りません。約束については、神はひとりで事を運ばれたのです。21 それでは、律法は神の約束に反するのでしょうか。決してそうではない。もしも与えられた律法が人を生かすことのできるものであったなら、実際に律法によって義が実現したことでしょう。22 しかし、聖書はすべてのものを罪の下に閉じ込めました。約束がイエス・キリストの真実によって、信じる人々に与えられるためです。

【序論】

毎週説教の準備をしながら感じている一つの大きな課題があります。それは、与えられたテキストが会衆の皆様の現実生活とどう関わっているのか、説教者としてどこまで切り込んでいけるかという課題です。ガラテヤ書を学んでいて、「律法」とか「約束」とか言われても、自分の実生活に結びつけて考えにくい面があるのです。殊に、一緒に礼拝に参加している子どもたちにとって、「訳の分からない話」となる懸念があります。そうならないと肝に銘じながら、説教準備に取り組んでおります。

「律法」ということばは本来「法」と訳すべきであります。伝統的に「法律」をひっくり返したものが聖書用語になってしまいました（英語：「Law」）。そして、そこにはどこかネガティブな響きが伴い、「律法学者」と言えばイエス様の敵のようなイメージが持たれやすい。しかし、本来は「法学者」程度に理解すべきところなのでしょう。「法」というものは子どもの世界にも存在し、家庭のルール、学校の規則、公共マナーなど、いくつかのレベルで関わりを持っています。子どもたちにとって「ルール」とはどんなイメージを持つのか聞いてみたいところではありますが、自分の幼少期を振り返りますと、「従わなくてはならないもの」として、何か自分を型にはめてくる枠のように感じていました。ルール違反をすれば罰せられるのは、大人になっても同じことです。交通ルールを破らないように、気をつけて運転をする。ルールがなければ、人間世界は無法地帯となって、事故や犯罪の温床となるでしょう。罪があり、危険な世にあって、ルールはなくてはならないのです。このことは、神が人間世界に与えておられるルールとしても理解することができます。いえ、「法の中の法」「法の根源」「すべてのルールの基礎」それが「神の法」だと言えるでしょう。

【本論】

前回扱った箇所（3:15-18）、パウロは律法よりも先に約束があったことを明らかにしました。時系列的にも、アブラハムに与えられた約束（子孫・土地は究極的に救いを指し示す）は、モーセを通してもたらされた律法に先んじていたのです。神の民は、律法を守るから神の民なのではなく、約束が与えられたから神の民なのである。そのような内容でした。それを受けての今日の箇所です。

本論 1. 律法の役割

では、律法とは何でしょうか。律法は、約束を受けた子孫が来られるときまで、違反を明らかにするために付け加えられ（3:19a）

救いの約束が先行して与えられたのであれば、後付けで加えられた律法には何の意味があるか。法などなくてもよかったのではないか。そうではない。神の民の生きるべき道しるべとして、律法（神の聖なる御心）は示されなくてはならなかったのです。神の民が腐敗することを神は求めておられなかった。神の民は、一定の規則の下で正しく歩む必要があったのです。しかし、パウロはここで驚くべきことを言っています。「（律法とは）違反を明らかにするために付け加えられ」たものであると。「～すべし」「～すべからず」という規則は、神の民の生活に「枠組み」を与えましたが、民の意識は「それに従うか」「それを破るか」の二択になってしまったのです。決まり事があると、それに照らして人の生き方は裁かれるようになります。

イスラエルの民は、神がお与えになった律法をもって互いの生活を監視し合い、神がどのように自分の生活を見張っておられるかを恐れながら生きようになりました。律法の本来の目的とはかけ離れた結果がもたらされてしまったのです。律法は元々、「如何に神と人を愛するか」が目的として定められたものでしたが、法的枠組みが与えられるとどうしても人は「監視」を始めてしまう。まさに「違反を明らかにする」ばかりのものとなってしまったのです。

しかしながら、パウロはこの律法の窮屈な役割には期限があるとも言っています。「約束を受けた子孫（キリスト）が来られるときまで」とあるように、キリストは人々を律法の束縛から解放すると言っているのです。律法に従うことによって、人間は神と人を愛することができなかった。「こうでなくてはならない」という枠組みの下では、人は積極的に愛することができないのです。少々変な例えになりますが、もし私がこんなことを言い始めたら違和感を覚えるのではないのでしょうか。「私は確かに妻を愛し

ていると言えます。なぜなら、我が家で定められている『パートナーの誕生日にはプレゼントをあげる』というルールを一度も破ったことがないからです。ルール違反をしなければ愛していることになるかという、そうではありません。愛とはもっと積極的に溢れ出てくるものであり、心で発動し、ルールそのものを覆い尽くしてしまうものです。プレゼントは心からあげたいと思うからあげるものではないでしょうか。主イエスが来られた目的は、私たちがそのように神と人を愛する者となることでした。

本論 2. 約束 > 律法

また、天使たちを通し、仲介者の手を経て制定されたものにすぎません。仲介者というものは、一人で事を行う場合には要りません。約束については、神はひとりで事を運ばれたのです。(3:19b-20)

ここでは、アブラハムへの約束とモーセを介して民に与えられた律法とが比較されています。律法とは、神から直接与えられたものではなく、モーセという「人」によって取り次がれたものです。モーセは 40 日間山にこもり、そこで二枚の契約の板に書き記された戒めを民のところに持ち帰りました。ここでは「**天使たちを通し**」とされていますが、モーセは天使を通してそのことばを聞いたという伝承が存在したからです。

主はシナイから来られ、セイルから彼らのために輝き昇り、パランの山から光を放つ。

幾万の聖なる者たちを従えて来られ、その右の手には燃え上がる炎がある。(申命 33:2)
その意味で、律法は、「神→御使い→モーセ→民」という段階を経てもたらされたと言えるでしょう。それに対し、アブラハムへの約束は「神→アブラハム」とダイレクトであり、仲介者を挟まないのです。パウロはこの比較によって、アブラハムへの約束はモーセ律法よりもはるかに優位性があることを伝えようとしている。神の救いの約束が先立ち、その約束の下にある者たちに生きる指針を示すものとして律法が与えられたのです。この順序が重要であります。

「**神はひとりで事を運ばれた**」とされていますが、これは申命 6:4 の「**聞け、イスラエルよ。私たちの神、主は唯一の主である**」という聖句に基づいています。神はひとりである。一人である方が与えてくださった約束も一つである。人間がそれに付け加えることはできないのです。律法を行なうことによって義とされようとするならば、神の約束に付け加えることになる。恵みを恵みでなくしてしまう。

本論 3. 人を生かせない律法

それでは、律法は神の約束に反するのでしょうか。決してそうではない。もしも与えられた律法が人を生かすことのできるものであったなら、実際に律法によって義が実現したことでしょう。(3:21)

律法にはできることとできないことがある。規則を与えることでは、人を救うことはできなかった。人にいのちを与える能力は律法にはなかった。神との生き生きとした愛の交わりを生み出すことができなかった。パウロはローマ7章で、律法がもたらしたネガティブな結果を大胆に記しています。

では、何と言うべきでしょうか。律法は罪なのか。決してそうではない。だが、律法によらなければ、私は罪を知らなかったでしょう。律法が「貪るな」と言わなかったら、私は貪りを知らなかったでしょう。しかし、罪は戒めによって**機会**を捉え、私の内にあらゆる貪りを起こしました。律法がなければ罪は死んでいたのです。私は、かつては律法なしに生きていました。しかし、戒めが来たとき、罪が生き返り、私は死にました。命に導くはずの戒めが、私にとっては死に導くものとなりました。罪が戒めによって機会を捉え、私を欺き、その戒めによって私を殺したのです。実際、律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖なるもの、正しいもの、善いものです。(ローマ 7:7-12)

ここに出てくる「機会」ということばは、直訳すると「跳躍版」であり、聖なる律法が人間の心に入ってくると、それが罪と化学反応を起こし、ジャンプ台となって人に貪りを起こさせるということが言われています。これは驚くべきことです。真に正しいことが何であるかを知ると、人はそれにどうしても逆らいたくなるというのです。

再び子ども目線で考えてみましょう。私自身が幼少の頃、「盗んではならない」という戒めがひどく自分を苦しめたことを覚えています。「盗み」が罪であることは心では痛いほど分かっているのですが、その心の律法に従うことができない自分がおり、罪を犯すと更に苦しみは増すのです。ゲームの時間が週1回1時間と定められていましたが、親不在のときに本体を見つけ出してはこっそりやっていました。その一瞬の楽しみは、自分に罪意識をつくり出し、常にうしろめたさを伴った(どこか毅然としていない)生き方を自分にもたらしていました。このように、ルールは子どもの生き方をある程度規制しますが、親を愛するためのものとはならないのです。

本論 4. 憐れむための「閉じ込め」(ローマ 11:32)

しかし、聖書はすべてのものを罪の下に閉じ込めました。約束がイエス・キリストの真実によって、信じる人々に与えられるためです。(3:22)

「律法は」と言いたいところが「聖書は」と言い直されている点が気になります。ここ

で言われている「聖書」とは「神の意志」のことであり、律法を含む旧約聖書全体を指し示すようです。旧約の限界、神の約束が成就していない段階と言ってもよいでしょう。律法は聖なる神の御心を示し、神の民の生活を閉じ込めました。律法自体には人を救う力がなく、人々は法の抜け穴を探し、心の伴わない宗教が構築されていきました。

私たちも心当たりがないでしょうか。とにかく決められたことをやっていたらよいという状態や、バレなければ大丈夫という考え。そこには喜びが伴っていないのです。律法を土台として生きていた民は、神を礼拝することにおいて、真に神を愛するのではなく、決められた祭儀を行っていたらよいという状態に陥っていました。

もう二度と空しい供え物を携えて来るな。香の煙はまさに私の忌み嫌うもの。新月祭、安息日、集会など、不正が伴う集いに私は耐えられない。あなたがたの新月祭と定め祭りを、私の魂は憎む。それらのものは私には重荷であり、担うのに疲れ果てた。（イザヤ 1:13-14）

律法がつくり出したものは、形ばかりの礼拝であり、神を愛する心ではありませんでした。民も内心それで良いと思っていたわけではないでしょう。祭儀は麗々しく行なっていながら陰で不正を行なっている指導者層を非難する人々もいたのです。

主イエスは神の約束を成就するために来られました。アブラハムに与えられた救いの約束をダイレクトに民にもたらすために来られたのです。神が人の間に住み、共に生活をされた。そこで真に神と人を愛するとはどういうことかをリアルに示し、救いのメッセージを語られた。恵みが何の妨げもなく人々の前に現れました。

言は肉となって、私たちの間に宿った。私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。（ヨハネ 1:14）

【結論】

私たちが立つべきところはどこでしょう。神の約束、私たちを無償で罪から贖い出してくださるキリストの恵みです。神の愛に浴することによって、私たちも神を愛するものとなる。そして、愛はそれに留まるものではなく、更に進んで隣人をも愛するものへと人を造り変えていきます。まず神が私たちを愛してくださった。その神を心から愛し返すところに、律法の本来の役割が取り戻されていくのです。

【祈り】

私たちに救いの約束を与え、イエス・キリストによって心からの愛を注いでくださった、天の父なる神様。私たちをも、あなたを愛する者とさせてください。そして、そのゆえにこそ、あなたの御教えを喜ぶ者とならせてください。他人を監視するための媒体としてではなく、あなたが喜ばれる生活ができる感謝に溢れた人生を歩ませてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
律法に先立ち、約束を与え給うた、父なる神の愛、
律法の支配下にあった者を解放し、神の愛に浴させ給うた、主イエス・キリストの恵み、
救われた喜びとして、神の御教えを愛する者とならせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。